

イオマンテ めぐるいのちの贈り物 (寮 美千子)



わたしは、生まれたばかりの熊のカムイだ。



そこは、くらくてあたたかかった。

かあさんのおいにつつまれて、わたしはむちゅうで、ちちをのんでいた。うとうとしかけたとき、とおくから、なにかきこえた。だんだんちかくなる。

「なあに、かあさん？」

「あれは、セタの声よ」

「セタ？ こわいもの？」

かあさんはだまされたまま、じっとしていた。そのとき、がさっと雪がくずれ、ちいさな穴がひとつ、あいた。

そこから、ひとすじの光が、棒のようにまっすぐのびてきた。そのときわたしは、はじめてかあさんの顔を見た。ひかりかがやくかあさんの顔。

「だいじょうぶ。ぼうやは、ここにいなさい」

かあさんはたちあがって、光へとまっすぐにあるいていった。おおきなからだのふちが、きらきらと金色にひかった。



かあさんが、せのびをするようにして穴をのぞいたとたん、びゅん、と音がした。

「あっ」

かあさんは、ゆっくりと両腕をひろげた。そして、いきなり背中から、どう、とたおれた。

「しとめたぞ！」

雪のかべがいっきにくずれ、わあっと光があふれかえった。

まばゆい、まばゆい、白、白、白。あふれる、あふれる、赤、赤、赤。かあさんの目からふきだす赤が、まっ白な雪に、みるみるひろがっていった。

セタがはげしくほえていた。

「めすの熊だ。子熊がいる」

おおきな手がのびてきた。

はじめて、人のおいをかいだ。



ぼくは、アイヌの男の子だ。

ろばたで木を彫っていたとうさんは、ふと手をとめ、耳をすました。

「雨だ」

ひげのおくに、ほほえみがひろがった。

「熊の子を洗う雨だ」

きょうは、さむさが一気にゆるんだ。雪が、やわらかい雨にかわったんだ。

「こんな雨がふるころには、熊の穴で、きっと子熊が生まれている」

「熊の穴って、あの山の？」

「ああ。おまえといっしょに、秋の終わりにみつけた、あのほら穴だ」

もえあがる炎のように赤や黄にそまった森の、おおきなおおきな木のねもとに、そのほら穴はあった。きつといまは、なにもかも白い雪のしただ。

とうさんは弓矢をとりだし、とりかぶとの毒をていねいにぬった。

「この毒はつよい。どんなおおきな熊でも、息をするまもなくたおれるぞ」



あさになると、そこらがみんな星の粉をまいたようにひかり、おそろしいほどの寒さがもどってきた。なにもかもが、かちんかちんにこおりついている。いつもは腰までもぐってしまふ森の雪も、骨のようにかたくしまり、もうどこまでも歩いていける。

「きょうは山へ、キムンカムイをおむかえにいくぞ」

と、とうさんがいった。狩りにいくんだ！

「ぼくも、つれてって！」

「だめだ、だめだ。きょうは、山で泊まりだ。兎もとれないようなこどもなんぞ、足手まといにしかならん」

とうさんは、かんじきをはき、山の杖をつき、弓と矢を背に、顔をかがやかせて、山へとはいっていった。セタが、うれしそうに、とびはねながらついていく。

まっ白な息を吐きながら、のしのし森へは行っていくとうさんたちを、ぼくは足ぶみをしながら、みえなくなるまでみおくれた。



その日、とうさんは、かえってこなかった。

そのまたつぎも、つぎの日も。

そとに出ると、こおりついた夜空に、三つ星がたかくひかっていた。あれは天のいろりのおき。とうさんも、あの星をみているだろうか。

きょうも、とっぷり日がくれた。それなのに、とうさんは、まだかえらない。

「だいじょうぶかな」

かあさんは、ろばたでシntaxをゆらしながら、うたうようにこたえた。

「だいじょうぶ。火のカムイがまもってくださるから」

まきがぼちっとはねて、めらめら炎がたちあがった。

そのとたん、とおくからセタの声がきこえてきた。

そとにとびだすと、月あかりにてらされて、きらきらとひかる道を、とうさんたちが、えものをしょって、もどってくるころだった。

せなかが小山のようにもりあがり、まるで天からおりてくる、りっぱな熊の行列のようだった。

▼

「ほうら、キムンカムイからのいただきものだ」
 いろいろばたに、うやうやしくおいたのは、たっぷりの肉と、
 みたこともないほどりっぱな毛皮。
 それから、とうさんは、ふところをひらいて、ちいさなけ
 ものをとりだした。

「子熊だ！」
 ぼくよりもさきに、かあさんがすっと手をのばした。
 「おお、よしよし。さむかったでしょう。こわかったでし
 ょう」
 かあさんは、子熊をしっかりだいて、おっぱいをふくませ
 た。子熊は、しがみつこうにしておちちをすった。

「赤ちゃんなんだね」
 「ああ、まだ目があいたばかりだ。けれども、りっぱなキ
 ムンカムイだ。カムイの国からやっていらした、たいせつ
 なお客さまだ」
 ぼくは、こわごとと子熊をのぞいた。
 はじめて熊のにおいをかいだ。

その夜は、コタンのどの家もどの家も、おなかいっぱいオ
 ハウをたべた。あぶらみいっぱい、とろりとおいしい熊
 肉のオハウだ。
 たべきれなかった肉は、ほそく切って火棚でいぶした。
 からだが芯からあつたまり、あさまでずっとほかほかして
 いた。

▼

子熊はぐんぐんおおきくなって、じきにおちちをのまなく
 なった。毛はふわふわで、目はくりくりだ。
 かあさんは、ごちそうをつくって、家のなかのだれよりさ
 きに、いちばんおいしいところをあげる。
 子熊はうれしそうに、はぐはぐいいながらたべる。
 みているぼくまで、うれしくなる。

おなかがいっぱいになると、子熊はあそびたがる。
 ぼくのあとばかりついてきて、まるで小さな妹のようだ。
 いろいろでろちろ火がもえていると、ふしぎそうなかおを
 して、つとつとその手を出そうとする。
 「あぶないよ」ととめるのは、にいさんのぼくのやくめだ。

ねむるときも、いつもいっしょだ。うでのなかで、ねいき
 をたてる。ときどき、ちゅくちゅく音をたて、夢でおちち
 をすっている。
 やっぱり、かあさんがこいしいんだろうか。

▼

雪がとけ、草がみどりにもえるころ、子熊はよほどおおき
 くなって、そとであそぶようになった。

ぼくらは野原でかけっこをした。

ぼくがはしると、子熊もどこまでもどこまでも、ころがる
 ようについてきた。

きのぼりだって、ずいぶんうまい。
 けれども、おりるのはとってもへたで、いつもあまえた声
 をだすから、ぼくがおぶっておりにやった。いちどはセタ
 においかけて、あわてて、こずえまでかけのぼったか
 ら、さあたいへん。子熊はこわくてわあわあなくし、とて
 もたすけにいけないし、とうとう、とうさんをよんできて、
 おろしてもらったこともある。

▼

それから、ぼくらはすもうもとった。
 子熊はちいさくて、かんたんにころげる。一度ころがし、
 二度ころがし、三度めにころがすと、子熊はいつもほんき
 になって、牙をむいてかかってくる。それでもあんまりち
 いさいから、ころん、とかんたんにころばせるけど、かわ
 いそうだから、まけてやる。すると子熊はさもじまんそう
 に、ふん、とはなをならすのだ。

▼

夏に草木がのびるように、子熊もぐんぐんおおきくなった。
 すもうをしても、もう、はんぶんはぼくのまけだ。それで
 も子熊は、爪もたてない。かんでも、必ずあまがみだ。

ある日、むちゅうで魚とりをしていたら、いつのまにか、
 子熊がいなくなっていた。青くなって、大声でよびながら
 川原をはしった。

ひとりで森へかえってしまったのだろうか。
 太陽はもりあがった雲のむこう、雲のふちが金色にかがや
 いていた。あふれる光が、空いっぱいひろがっている。
 川は金の小舟をうかべたように、まぶしくきらきら光って
 いた。息をきらせ、目をほそめてよくみると、むこう岸の
 石ころだらけの川原に、ぽつんと、ずぶぬれの子熊がいた。
 すわりこんで、ぼんやり空をみあげている。

ばしゃばしゃ水のなかをはしっていくと、子熊はやっと気
 づいてふりむき、ひと声おおきくないた。なんだかせつな
 い声だった。

ぼくにむかってまっしぐらにはしってきて、ざぶんと水に
 とびこんだ。けれど、流れがあんまりきゅうで、子熊は流
 されそうになる。

やっとの思いで子熊をだいて、ようやく岸にもどったとき
 には、空はもう、こわいほどまっ赤にもえていた。子熊は
 ふるえながらぼくにしがみつ、空をみあげた。

空にむくむくのびる雲は、まるでおおきな熊のかたち。
 夕焼けで、血のように赤くそまつた。

▼

「だから、つなをつけろといっただろう」

しかられるかとおもったけれど、ひとこと、そういわれただけだった。とうさんは、子熊のあたまをぐりぐりなでて、「そうか、そうか。もうひとりで川をわたれるのか」と、目をほそめた。

「どうだ。すもうはまだ、子熊がまけてばかりか」「はんぶんは、ぼくのまけだよ」

そういうと、とうさんはおおきくうなずいた。

「そうか。子熊もずいぶんおおきくなった。力もよほど強くなった。そろそろ、家をつくってさしあげなければいけないな」

とうさんがつくったのは、丸太で組んだおりだった。子熊は、昼も夜も、そこでくらすことになった。夜になると、チセにいられてくれと、かなしげな声でないた。その声がせつなくて、ぼくは耳をふさいだ。

▼

秋になった。森は赤や黄にそまり、どんぐりやくるみで、ぎっしりとうなるほど。やまぶどうやくくわのあまい香りが、もうどこにでもただよっていた。川は、さけでいっぱいになって、うるうる銀色にもりあがる。人も熊もきつねもとりも、みんな、かがやく光のなかだ。ああ、ここに子熊がいればと、ぼくはなんべんおもっただろう。子熊のために、ぼくは、いちばんあまいこくわをつみ、高くはねるさけをとった。

子熊はますます大きくなり、毛は金色にかがやいて、爪も牙もよほどりっぱになった。それでも、しぐさはまるで子どもで、ぼくがそばにいくだけで、さもうれしそうにのどをならす。丸太のあいだから手をいれると、ぐいぐいはなをおしつけてきて、いつまでも、森と川のにおいをかいでる。

▼

風に雪のにおいがするとおもったら、白いものがふってきて、それから三日ふりつづき、あたりはすっかりまっ白になった。冬のはじまりだった。

ある日、けだものがほえるような声がして、おどろいてみに行く、子熊がおりのかなかであばれていた。ふりしきる雪に、しきりにほえかかっている。

「どうしたの。なにがあったの?」
いくらなだめても、小熊はいっこうにおさまらない。そばへよるのもこわいくらいだ。
すると、とうさんがやってきていった。
「心配するな。そろそろ、カムイの国にかえりたくなかったんだ」
「カムイの国って?」

「この子のかあさんがいるところさ」
ああ、かあさんにあいたいんだ。だから、こんなにほえるんだ。

「おぼえているかい。この子が来た日のことを」
どっしりとした肉のかたまり、りっぱな毛皮。そしてとうさんは、ふところから子熊をだした。やっと目があいたばかりの、ちいさな子熊を。

「この子のかあさんはね、たくさんの肉をせおい、毛皮の服をきて、カムイの国から、わたしたちのところにあそびに来てくださった。そして、この子をわたしたちにあずけ、カムイの国へかえっていかれた。いまごろはカムイの国で、この子がくるのを、いまかいまかと、まっておられるだろう」

とうさんは、ぼくの肩にそっと手をおいた。
「だから、この子を送ってさしあげよう。カムイの国へ」

▼

ぼくは知っている。送るということを。
川でさけをとるときに やなぎの木でつくったきれいな棒でたたくんだ。
すると、さけは死ぬ。送られて、カムイの国へもどる。

子熊を送るのも、おなじことだ。

▼

イオマンテがきまると、家のなかきゅうにいそがしくなった。

とうさんたちは、山へ木を切りにいった。
かえってくると、その木でみんなでイナウづくりだ。
木にマキリをすべらせると、するするとはなびらのようなけずりかけができて、みるみるきれいなイナウになる。
「カムイたちは、イナウがとてもすきなんだ。イナウはカムイへの大切なおみやげなんだよ」

かあさんたちは、ひえやあわで、お酒をかました。
いく日かすると、シントコからいいにおいがしてきた。
フチたちがやってきて、うたいながらお酒をこした。

とうさんたちは、イナウや花矢をつくるのにいそがしく、かあさんたちは、ごちそうのしたくでてんでこまいった。みんなみんな、イオマンテのしたくでおおわらわだ。

いつも人があつまって、にぎやかだった。
心がうきうき、うきたつようだ。
けれども、ぼくはくるしかった。
その日がくるのが、こわかった。

▼

その日、空はきいんと青くはれ、雪は、いたいほど白かつ

た。

チセの壁には、花ござがかざられ、子熊へささげるおだんごや木の実や宝物でいっぱいだ。

とうさんは、あたらしい冠をかぶり、刺繍の着物に陣羽織。なんだか、ずいぶんりっぱに見える。

やがて、エカシがやってきて、火のカムイにお酒をささげ、カムイノミがはじまった。

火はめらめらともえあがり、お酒の滴が、炎のなかでじゅっという。

エカシの声がひくくひびき、祈りのことばが、つぎからつぎにささげられた。

そして、とうとう子熊が、おりからだされるときがきた。

▼

子熊の首につながつられ、おりの丸太がはずされた。やっとおりからでられた子熊は、ぼくをみて、うれしそうにかけてきた。

けれども、ぴんとつながりは、ぼくのところへこられない。子熊はおこってたちあがる。

その子熊のはなさきで、笹の葉のたばを、ばさばさゆらす人がいる。子熊を遊ばせるんだというけれど、まるで、わざとおこらせているみたいだ。

子熊はつなでひかれていって、ひろばの杭につながれた。さんざん笹であそばされ、子熊はいよいよたけりくるう。体がぶるぶるふるえてる。

「なんておどりのうまい子熊だ」

「もうすぐカムイの国にかえられるので、あんなによろこんでいらっしゃるよ」

「さあ、カムイにうたとおどりを楽しんでいただきましょう」

まるで旅立つ子熊をはげますように、みんなぐるぐる輪になって、うたっておどって、手拍子をとる。

▼

やがて、子熊に花矢が射られる。きれいなまよりのついた飾り矢だ。みんな、さきをあらそって矢をひろう。

ぼくは一步もうごけない。

心の臓がどきどきして、ただただ目をみひらいていた。

うたと手拍子がごうごうひびく。

子熊がその手で射かれた花矢をはらった。

それが、まっしぐらに足もとにとんできた。

(さあ、とってくれ。おまえのものだ)

どこからか、ふいにそんな声が出て、ぼくははっと気づき、いそいで花矢をひろいあげた。子熊をみると、ぼくをまっすぐみつめている。

そのままぐっと足をおり、小熊はじっとうずくまってしまった。

すると、エカシがしとめ矢を、鋭くとがった矢をつがえ、きりりと弓をひきしぼる。ひょう、と矢が射られた。

子熊は短くさけび、はねるように雪にたおれた。

ぐさりと胸にささった矢の、矢羽根がふるふるふるえている。

「いまこそ、カムイが旅立ちます。さあ、がんばって、がんばって」

かあさんたちがなきながら、さけぶようにうたっている。とうさんたちはかけよって、子熊の首を丸太にはさみ、馬のりになってしめつける。

ぼくは、花矢をにぎりしめた。

もうすぐだよ。すぐに帰れるからね。ぼくは、ぜったいに目をとじない。おまえが旅立つのをみおくるんだ。

▼

わたしは、ちいさな熊のカムイだ。

気がつくと、わたしは

自分の耳と耳のあいだにすわっていた。

美しい花矢が、空のはてへとかけてゆく。

あれは、天へのしらせの矢。

かあさんは、もうすぐわたしが帰るというしらせを、うけとっただろうか。

▼

まっ青な空から、ばらばらとくるみやだんごがふってきた。人々はみな声をあげ、たのしげにそれをひろっている。こんな雪のまっただなかで、アイヌの国は、なんとゆたかなところだろう。

おや、つなひきがはじまった。

あちらは男、こちらは女。がんばれ、がんばれ。どちらも、がんばれ。わたしもおもわず、つなをひく。

おやおや、こんどはすもうだぞ。

弓くらべも、はじまった。

わたしは、ゆかいでたまらない。

首になわをつけた男が、あばれるわたしのまねをしている。女や子どもはにげまどい、大の男もかるがると雪のなかへと、なげとばされる。

みんなはどっとわらいだす。

わたしも腹のそこからわらう。

やあやあ、うたがはじまった。たのしいおどりもはじまった。わたしもうたい、わたしもおどる。

ああ、アイヌの国は、なんとたのしいところだろう。

▼

ぼくは、アイヌの男の子だ。

子熊の毛皮ははがされて、肉は枝につるされた。
つなひきをしたり、うたったり、みんなはそれはおおさわぎ。なにもかもが夢のようで、うれしいんだか、かなしいんだか、ぼくは、あたまがぼうっとなった。

▼
子熊のカムイを、チセにまねいて、きれいにかざって、ごちそうだ。だんごにくるみにいなきびごはん、魚や煮物、お酒もたっぷりふるまわれる。
のんで、うたって、おどって、たべて。
チセは、わらいごえでいっぱいだ。

それから、肉のオハウがでてきた。あぶらみばかりの、とろりとおいしい、あつあつのオハウだ。おいしい、おいしいとぼくはたべ、それからふいに思いました。

これは、あの子熊の肉。
ついさっきまで、子熊だった肉。
ぼくは、子熊をたべている。

ああ、あのときもそうだった。子熊がここに来た夜に、おなかいっぱいオハウをたべた。あれは子熊のかあさんの肉。
ぼくは、子熊のかあさんをたべたんだ。

それだけじゃない、みんなみんな、兎も鹿も、さけやますも、ぼくは、いのちをたべている。みんなのいのちをたべている。
ぼろぼろ、なみだがこぼれてきた。

「なくんじゃない。子熊のカムイがかなしまれるぞ」
エカシが、ぼくをはげました。
「さあ、たのしく送ってさしあげよう」

▼
わたしは、ちいさな熊のカムイだ。

夜ふけになると、ユカラがはじまった。
ろばたをたたいて拍子をとって、手に汗にぎる、だいぼうけん。さあ、どうなるか、どうなるか。
さあ、いまこそとおもったとたん、エカシはぶつりと、やめてしまった。

「このつづきは、またこんど。ふたたびコタンに、いらしたおりに ゆっくりおきかせたいしましょう。」
ああ、きつとまたもどってこよう。
かならずここに、もどってこよう。
わたしは、かたく心にきめた。

いよいよ別れのときがきた。
たかだかとイナウがかざられ、わたしは闇へとあゆみだす。

▼
星々が、おそろしいほどきらめいていた。
美しい花矢が、山のいただきめがけてかけてゆく。
ながれ星のように光の粉をまきながら、深い闇を切りさいてゆく。
空にひしめく魔物はしりぞき、銀色の道があらわれる。
カムイの国へとつづく道だ。

アイヌのくれた酒のひと滴は、カムイの国では六樽の酒だ。
山のようなみやげをせおい、わたしは銀の道をゆく。
カムイの国がちかづくと、そこらはとてもまぶしく光り、そのむこうから、かあさんのやさしい声がした。

▼
ぼくは、アイヌの男の子だ。

夜が明けると、野にも、たかくかかげられた子熊の頭にも、うっすらと雪がふりつもっていた。

「ゆうべ、あんなに晴れてたのにね」
そういうと、エカシはとおい山をみつめ、大きくひとつ息をした。

「キムンカムイが、ご自分の足跡を消すために雪をおふらしになったんだ。ふしぎなもんだ。それがどんなに晴れた夜だろうと、キムンカムイをお送りしたあとは、かならず夜明けに雪がふる。さらさらと流れるようなこな雪が」
しんとつめたい風のなかに、光の粉が舞っていた。

『熊の子を洗う雨』がふったのは、それからまもなくのことだった。

▼
いちめんの白が緑にかわり、はげしい夏の光がみちて、実りの秋には赤や黄になり、またいちめんの白になる。
いくつもの季節がとぶようにすぎていった。

こどもはすっかりいい若者になり、狩りの腕はコタンでいちばん。
ユカラもコタンのだれよりうまく、みんながそれをききたがる。

▼
ある年のこと、太陽は雲のむこうで白くかすんでいるばかり、秋になっても、木の実実らず、畑のひえも実がはいらない。鹿は森から消えてしまい、さけもすこしものぼってこない。

赤毛のあばれ熊が山からおりてきて、夜な夜なコタンをおそった。あのウエンカムイをやっつけてくれと、若者はみんなにたのまれた。

その夜、若者は夢をみた。子どものころにいっしょにくらした、あの子熊の夢だ。子熊はひとり、夕ぐれの川原で、ぼんやり空をながめていた。雲のふちを金色に輝かせた光が、空いっぱいひろがっていた。子熊は、こちらをふりむくと、泣くようなわらうような顔をしたのだ。

めざめると、若者はおもった。

ああ、あの子熊がウエンカムイになったのだ。子熊よ、あんなにやさしくしたのに、なぜそんなものになったのだ。若者は、首からかけたひもをちぎってなげた。ひものさきには、あの日の花矢がついていた。

▼

若者が川原にいくと、そこには小山のようにおおきな熊がいた。とおいあの日のように、すわりこんで、ぼんやり空をながめていた。若者がそっとちかづくと、熊は気づいてこちらをふりむき、にわかに両腕をおおきくひろげ、ぐわっとたちあがった。太陽を背にして、顔もなにもかもまっくろだ。毛皮のふちだけが、きらきらと金色に輝いている。若者はあわてず矢をつがえ、熊にむかってひょうとはなった。

熊は両手でその矢をおしただくようにして、それから、ぼったり前にたおれた。

▼

近づいて顔をつかみあげると、血のりでまっ赤にそまっていた。手も足も胸も血まみれだ。たった一本の矢でこんなに血まみれなはずはないと、若者がふしぎにおもってみれば、川原に点々と、血のあとがある。

おどろいて、そのあとを追うと、川のなかで赤毛の熊が死んでいた。

熊は、若者をたすけるために、カムイの国からやってきたのだ。いのちがけでウエンカムイをたおし、ここで若者をまっていたのだ。カムイの国からかついできた、肉と毛皮を手わたすために。

「わるかった、わたしがわるかった。おまえが、ウエンカムイになるはずがないのに」

若者は、声をころしてないた。

そして、小枝で石をたたき、低い声でユカラをうたいはじめた。あの日、途中で終わったユカラのつづきを。

▼

若者は、キムンカムイの肉と毛皮をもちかえり、酒とイナウをささげて、ていねいに送った。

その夜のことで、夢にキムンカムイがあらわれた。

「若者よ。どうか、あの赤毛の熊も送ってやってくれ。このごろ、山にはたべものがなく、強い熊なら生きていける

が、弱い者はどうしようもない。あれは、愚かな峰じりの熊。しかたなしに山をおりたのだ。強いからではない。弱いからウエンカムイになったのだ。どうか、ゆるしてやってくれ。ただ一本のイナウでいい。まつてやってほしい。そうすれば、あれもカムイのすそに名をつらねられる。心をいれかえ、おまえの守り神になるだろう。

わたしも、おまえが死ぬまで、おまえを守りつづけよう」

若者は、美しいイナウをつくり、赤毛の熊をまつた。

すると、森には鹿がもどってきて、川にはさけがのぼってきた。

それからというもの、コタンは二度と飢えることがなかった。

やがて若者は、心の美しい女を妻にし、こどもにもめぐまれた。

山にいけば、いつも必要なだけのえものがとれ、これといってほしいものもなく、たべたいものもないというほど、なにもかもがみちたり、しあわせにくらしたということだ。

▼

その若者が、わたしなのだ。

だから、子どもたちよ、よくおぼえておくんだ。

ひと粒のあわもひえも、ひときれの肉も魚も、みんなのち。

わたしたちは、いのちをたべている。

いのちと魂との、おおきなめぐりのなかにいる。

すべては、めぐるいのちのめぐみ。

すべては、めぐるいのちのめぐみ。

と、ひとりの老人がいいながら、静かに息をひきとりました。

『イオマンテ ～めぐるいのちの贈り物～』

寮美千子／文、小林敏也／画、パロル舎、2005